群教セ	G11 - 04
	平15.213集

自己有用感を高める文化祭づくり

── 文化祭実行委員による「幸せのかたち」づくりを通して ──

特別研修員　　徳増　和哉

〈研究の概要〉

本研究は、文化祭という学校行事を自分たちの手でつくり上げていく活動を通して、目標を設定し、計画し、実践するという課題解決のプロセスを学び、その過程で達成感・満足感を味わい、文化祭実行委員が自己有用感を高めることを目指したものである。

具体的な活動として、前回の文化祭の振り返りによる課題の発見および今回の文化祭のテーマ・方向性の決定、課題解決に向けた計画・準備、役割分担による文化祭の実践を行った。

【キーワード　：　特別活動　高等学校　生徒会活動　自己有用感　文化祭　】

Ⅰ　主題設定の理由

豊かな自然に囲まれ、素直な生徒が多い本校に勤務している私が常々感じてきたことがある。それは生徒会行事において、もっと生徒が積極的に活動できるはずであり、生徒にはその能力が充分あるはずだという思いである。生徒が主体的・積極的に行事に関わろうとしない原因としては、学校行事や生徒会活動は先生から与えられてやるものだという意識が身に付いてしまっていることが挙げられる。生徒自ら主体的に行事をつくったという経験が少なく、その機会もあまり与えられなかったようである。本来、生徒会活動は生徒主体で行うものであり、本校の生徒にはその能力があるはずである。しかし本校の生徒は自らの能力を低く評価してしまい、何かをやる前にあきらめてしまう傾向が見受けられた。「生徒が自分の本来の能力に気づき、自己有用感を高め、積極的に物事に関わってもらいたい」と私は思う。そのために必要なものは「成功体験」である。自分たちで考え、協力し、行事をつくり上げるという体験を通して、集団の一員としての達成感・成就感を味わえば、生徒は必ず変わっていくと私は信じる。その機会を与え援助していくのが教師の務めだと考える。

本校では二年に一度文化祭を行っており、今年がちょうどその年にあたる。この機会をとらえ、生徒主体の生徒会づくり、生徒が積極的に参加する学校行事づくりを進めたいと考えた。本校の生徒の半数は、卒業後就職して社会に出ていく。就職していく生徒にとって今回の文化祭は学校生活最後の文化祭である。「今回の文化祭が一生の思い出になって欲しい、卒業にあたって『本校に入学してよかった』と思ってもらいたい」というのが私の願いである。

この願いを実現するべく、生徒会役員・文化祭実行委員（以下、文化祭実行委員とする）が主体的に活動し、生徒一人一人が積極的に参加する文化祭づくりを行いたい。その過程を通して、文化祭実行委員の生徒が達成感・成就感を味わい、その結果として生徒の自己有用感が高まり、「本校に入学してよかった」と思って卒業してもらいたいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

文化祭実行委員が自主的に考え協力して文化祭を企画・準備・開催する過程で、課題に積極的に関わり、お互いに学び合う。そして文化祭をやり遂げた達成感・成就感を味わえば、文化祭づくりを通して生徒の自己有用感を高めることができるということを実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　生徒会役員で前年度生徒会活動についての振り返りの話合いを行い、前年度の問題点・改善点を明確にする。それをもとに今年度の活動の目標を立て、その実現に向けて決意する。また、前回の文化祭を経験している３年生へアンケートを実施し、前回の文化祭の問題点を明らかにする。それらをもとに今回の文化祭に向けての課題を設定し、文化祭実行委員で共有する。以上のことで文化祭実行委員の意識が変わり、目標を持って文化祭づくりを始めることができるであろう。

2　文化祭への目標を持った文化祭実行委員が、全校の生徒が文化祭での「幸せのかたち」づくりに参加するにはどうしたらよいか徹底的に話し合う。この話合いをもとに、各プロジェクトを立ち上げ、自己理解・適性に応じて役割を分担する。これらの話合い活動を通じて、お互いに学び合うことの大切さを実感し、協力し合う集団ができるであろう。

3　各プロジェクトが企画実現のための計画を練り、それぞれの文化祭実行委員が自分の役割に基づき準備をし、文化祭をつくり上げる過程を通じて、課題解決のプロセスを学ぶ。また自分たちの手で文化祭をつくり上げたことで達成感・成就感を味わう。さらにその活動を振り返ることを通して、個人として集団の一員として自己有用感を感じることができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　「自己有用感を高める文化祭づくり」とは

①　「自己有用感を高める」について

自己有用感の高まった生徒とは、集団の一員として自分の役割を自覚し、自主的に活動することのできる生徒のことである。

本研究は、文化祭実行委員が自主的に活動し協力して文化祭という行事をつくり上げ、集団の一員として達成感・成就感を味わうことをねらいとしている。文化祭をやり遂げた達成感を味わえば、自分が役に立っていると感じることができ、それをもとに学校に対する所属意識が深まるものと考える。

②　「文化祭づくり」について

文化祭は生徒と教員が協力して作り上げていくものである。生徒が自主的に企画・活動し、それを教員がサポートしていく、そのための組織づくりが重要である。本研究では文化祭実行委員の組織づくりを通して、生徒が主体的に活動できる文化祭を目指した。

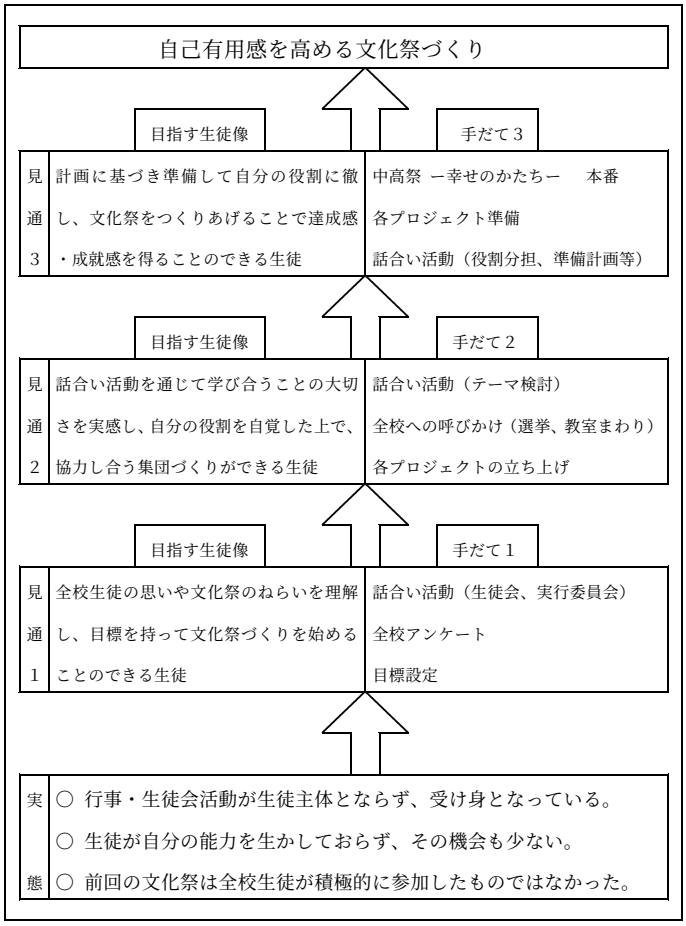


図1　全体構造図

(2)　「『幸せのかたち』づくり」とは

「幸せのかたち」とは、本校の文化祭「中高祭（なかこうさい）」における今年のメインテーマであり、全校アンケートをもとに、実行委員で話し合って決めたものである。文化祭の一日目は校内発表で、二日目が一般公開である。一日目は全校生徒が楽しんで自分たちが幸せになり、二日目は来て下さった方々を幸せにしようという文化祭での「幸せのかたち」づくりを目指した。

文化祭での「幸せのかたち」づくりの過程で、文化祭実行委員が協力して話合いや準備を行い、他の実行委員や教師、生徒の考えや活動から学ぶ。自分もまた他の生徒に影響を与えていることを知り、お互いに成長していく集団づくりを行うことがその目的である。

2　実践の概要及び結果と考察

(1)　文化祭実行委員が目標をもって文化祭づくりを始めることができたか。【見通し１】

ア　実践の概要

生徒会役員で前年度生徒会活動についての振り返りと今年度の目標設定の話合いを行った。さらに文化祭に向けて、3年生を対象として前回の文化祭の振り返りのアンケートを実施した。また全校生徒にはどんな文化祭にしたいかをアンケート調査した。その結果に基づいて生徒会役員、文化祭実行委員で話合いを行い、文化祭に向けての目標がもてるようにした。

イ　結果と考察

◎　生徒会役員の意識改革

六月末の生徒会役員改選後、新・旧生徒会役員で前年度生徒会活動についての振り返りの話合いを行い、一年間の各行事の「よかった点」「悪かった点」、および「改善点」を明確にした。そこで出た問題点・改善点を整理すると、「よい準備ができた行事」、「一人一人の役割が明確で、それに基づいて活動できた行事」は生徒自身の評価も満足度も高く、その一方で「準備がぎりぎり」「何をしていいか分からなかった」などの感想をもった行事も多かった。

この結果を踏まえて、新生徒会役員で「今年度の生徒会の運営をどうするか」について話し合った。昨年度の問題点を明確化し、自分たちが何をするべきか理解できたことで、前回の話合いよりも活発に意見が出た。この話合いの中で、生徒会長が「今年は文化祭があり、この最大の行事を絶対に成功させたい」と発言し、それが生徒会役員全員の気持ちとなっていった。

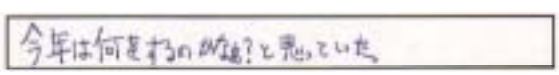
◎　前回の文化祭の見直し

文化祭の成功のためには、前回の文化祭の見直しが必要であるということになった。そのために前回の文化祭を経験している３年生に、前回の文化祭の振り返りのアンケートを行った。その結果、「学校全体での盛り上がりがない」「統一性がない」「入場者が少ない」「宣伝活動が少ない」「後夜祭がやりたい」などの問題点・改善点が浮上した。なかでも、「学校全体での盛り上がり（一体感）に欠けている」という意見が多く、生徒会役員の今回の文化祭の目標はこの点を改善することに定まった。

この段階までの話合い活動は、生徒会長を議長にしながらも、教師の私が指導をする場面が多々あった。具体的には、ＫＪ法による問題点の整理、話合いの進め方、人の意見の聞き方、発言の仕方等である。生徒が主体的に話し合うことが目標であるが、まずは話合いの形式に慣れ、今後の話合いが円滑に進むための土台づくりが必要であると考えた。

◎　文化祭実行委員の意識づけ

資料１　活動開始当初の実行委員の感想



文化祭を成功させるためには、生徒会と各クラスの生徒をつなぐ架け橋となる文化祭実行委員（各クラス２名以上からなる）の意識が変わることが必要である。このアンケートの結果をまずは文化祭実行委員会（40 名）に説明して、実行委員会の力に文化祭の成功がかかっているという意識づけを試みた。しかし、資料１の感

想にあるように、全体に向けて一方的に説明したのでは、文化祭実行委員全体の意識づけまではできなかった。

◎　文化祭実行委員の中心メンバー選出

生徒会だけでは文化祭は成り立たない。文化祭実行委員の力に文化祭の成功がかかってくる。実行委員40名の中から、中核となって活動する生徒を選出することがまず必要であった。そこで実行委員長と副委員長を募ると、委員長に２名（３年生）が、副委員長には10名（３年生９名、２年生１名）が名乗り出た。３年生は最後の文化祭であるという思いと、１年生時の経験を生かそうという思い、さらには前回の不完全燃焼であった思いが、彼らを立候補させたのだろうと考える。この時点で、生徒会とこれらの実行委員会の中核のメンバーが一丸となって、どれだけ多くの生徒を巻き込んでいけるかがこの文化祭の目標となった。大きな集団を変えるためには、まず小さい集団から変えていくことが重要である。

このように文化祭実行委員全員が目標をもって文化祭づくりを始めるには至らなかった。しかし生徒会役員と実行委員長・副委員長たちは今回の文化祭のねらいに気づき目標をもって文化祭づくりを始めることができたといえる。

(2)　文化祭実行委員が話合い活動を通じて学び合うことの大切さを実感し、協力し合う集団ができたか。【見通し２】

ア　実践の概要

文化祭に対する全校の意識を高めるために、文化祭実行委員長を全校生徒による選挙で決めた。その後実行委員会で話し合って決めたテーマを全校に浸透させるために、全クラスを実行委員長ほか数名で回って説明した。また少しでも多くの生徒が参加できるにはどうしたらよいかを文化祭実行委員で話し合い、いくつかのプロジェクトを立ち上げ、それぞれの役割を決めて目標実現に向けて活動を始めた。

イ　結果と考察

◎　文化祭実行委員長選挙

文化祭実行委員長は、今までは文化祭実行委員会の中だけで決めていたが、今回は七月初めの全校集会の時間に立会演説をおこない、全校生徒の投票によって実行委員長を選出することとなった。自分たちが選んだ実行委員長のもと文化祭をつくっていくという気運を高めることがその目的である。

◎　文化祭テーマづくりとテーマの普及活動

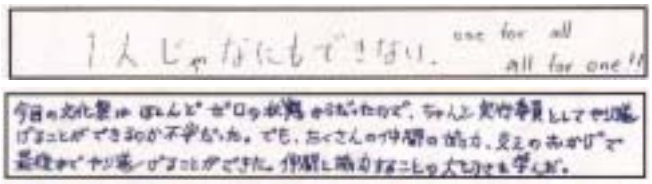
委員長が決まり、実行委員会が最初に取り組んだのが文化祭のテーマづくりである。全校生徒への「どんな文化祭にしたいか」というアンケートでは、大半の生徒が「楽しい文化祭にしたい」と書いている。実行委員会はテーマ選びの話合いを昼休み、放課後と繰り返した。ブレーン・ストーミングを用いて「楽しい」から連想していった。その結果たどりついたテーマが「幸せ」というものであった。さらにその「幸せ」の印象を深くするため、話し合って決めたのが「幸せのかたち」である。

この段階の話合いでは、実行委員長を中心に自由に発言をしていくようにしていった。まだ話合い自体に慣れていない生徒もいるので、話合いが進まないときは教師側からのアドバイスを行い、話合いの目的を明確にした。テーマを決めることは文化祭を進めていくにあたって根本的なことだということを認識させることに力を注いだ。また人の話をよく聞き、理解してから発言することを心掛けるよう指導した。相手の言っていることを理解し、その意見を積み上げていくことが発展的な話合いだということを体験して欲しいと考えた。

テーマ決めの話合いの中で、苦労して生み出したこのテーマを生徒全員に浸透させたいという気持ちが自然と実行委員の間で高まった。そこで、委員長が「全クラスを回らせて下さい」

と発言する。これを受けて、ＬＨＲの時間、実行委員長・生徒会長ほか数名で、全クラスを順番にまわり、テーマ発表、各クラスの企画についてのお願い、文化祭への協力要請をした。３年生が１年生・２年生に頭を下げることで、実行委員会の本気が示された。話を聞いている生徒たちの表情も、教師から説明されるより真剣なものであり、効果的であった。テーマ決めの話合いとテーマの普及活動を行うことで、文化祭実行委員に一つの集団として協力して文化祭をやり遂げようという姿勢が生まれてきた（資料２）。

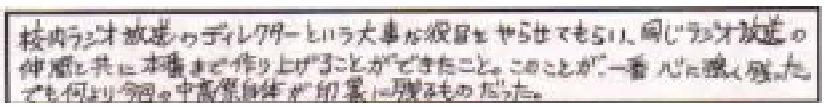
資料２　協力を学んだ文化祭実行委員の感想



◎　各プロジェクトの立ち上げ

全体への呼びかけが終わり、全校で参加できる文化祭にするべく、夏休み中に文化祭実行委員による会議が数回開かれた。そこででてきたのが、文化祭で「幸せのかたち」を実現するために、プロジェクト（食堂、紅白歌合戦、校内ラジオ、後夜祭）を組み、各プロジェクトのリーダーを決めるということだった。そのリーダーを中心に各プロジェクトのスタッフを決め、それぞれに役割を与えていくこととした。それぞれの役割は、リーダーと教師が相談して、各生徒の適性を考えて配置した。役割を明確にさせることで、自分のなすべきことが見えてきたようである（資料３）。各生徒の役割を明確にすることは、実行委員組織を運営していく上で、非常に重要なことであるといえる。

資料３　校内ラジオプロジェクトリーダーの感想



テーマ決めからプロジェクトの立ち上げまでの話合い活動を続けていく中で、生徒は他の生徒の意見を聞き、自分の役割を把握し、協力することの大切さを学ぶことができた。このように文化祭実行委員会は協力し合う集団となることができたといえる。

(3)　自分の役割を理解し、計画に沿って文化祭を行うことを通じて成就感・達成感を味わい、その活動を振り返ることを通して自己有用感を感じることができたか。【見通し３】

ア　実践の概要

各プロジェクトごとにリーダーが決まり、一般の生徒からの協力者を加えて、文化祭当日にむけ準備を進めていった。その過程の話合いや準備作業を通じて、それぞれが学び合う経験ができるよう配慮して進めていった。文化祭当日、各プロジェクトの生徒は計画に基づき、それぞれが自分の役割に応じて実践していった。文化祭を終えてから、最後の話合いを行い、自分たちのしてきた活動を振り返った。

イ　結果と考察

各プロジェクト（食堂、紅白歌合戦、ラジオステーション、後夜祭）にリーダーを決め、実行委員は各プロジェクトに分かれ、そこで役割分担を決め、準備作業を進めていった。これら四つのプロジェクトの中から、ここでは後夜祭プロジェクトについて記述する。

◎　後夜祭実現に向けて

「後夜祭をやりたい」という意見は、３年生に行った事前アンケートの中にも多くあった意見である。前回の文化祭では、実行委員会から後夜祭開催の提案があったが職員会議で否決されて実現しなかったという経緯がある。当時１年生で実行委員だった後夜祭リーダーの生徒はこの経緯を知っており、今回の文化祭では、ぜひ「後夜祭を実現したい」という提案をしてきた。この意見を受けた私たち生徒会教員チームは、なぜ前回の文化祭で後夜祭が実現できなか

ったか、以下の理由を文化祭実行委員に示した。

①キャンプファイヤーは火の始末が大変で、近隣に迷惑がかかること。

②屋外で行うと本校生徒以外の部外者が無断で参加してしまう恐れがあること。

③生徒の帰宅時間が遅くなり、保護者に心配をかけてしまうこと。

前回の文化祭では後夜祭をやりたいという気持ちが先行し、リスクに対する対策を考えていなかったことが職員会議を通らなかった原因であった。上記の①～③を改善できれば、職員会議で承認され、後夜祭が実現する可能性があると文化祭実行委員に示した。職員会議まで時間がなく３年生は就職試験も迫ってきている九月前半ではあったが、昼休みを中心に生徒会・実行委員と生徒会担当教員とで話し合った。今回の話合いの過程においては、なるべく教員側からは発言を控え、見守ることとした。生徒から質問があれば、それに答えるようにし、解決案を生徒が見つけるまで待つこととした。それぞれの問題点に対する解決策を考え、それらを整理し、以下の通り考えを一本化した。

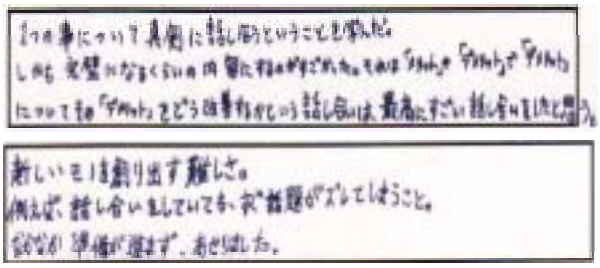
・後夜祭の場所は体育館で行い、そこにイルミネーションを飾る。（①、②に対する対策）

・参加する生徒は保護者の承諾書を提出してもらい､引き換えに参加チケットを受け取って、それを当日受付に提出する。（②、③に対する対策）

これらの話合いの結果を職員会議に提案し、後夜祭の実施が了承された。

生徒が後夜祭実現に向け真剣に話し合い、メリットとデメリットを一つ一つリストアップしていき、その対策を考える。この話合い活動は本当に時間のかかる難しいものであったが、資料４からも分かるように、生徒はお互いの意見から学び合い、成長することのできた話合いであった。

資料４　話合いについての感想


この事について真剣に話し合ったということも嬉しかった。
しかも 完璧になるくらいの内容にすることができた。それは「ジャンケン」「デメリット」「デメリット」
にかんしてもの「デメリット」をどう改善するかという話し合いは最高にすごい話し合いをしたと思う。

新しいものを創り出す難しさ。
例えば、話し合いをしていても、肝心話題がズレてしまうこと。
なかなか準備が進まず、あせりはした。

前回の文化祭ではできなかった後夜祭の実現という課題を解決するため、真剣に話し合った。その結果を教員に申し出、教員もそれに応えた。生徒会担当以外の教員からも後夜祭のイルミネーション制作の協力の申し出があった｡生徒が変わり教員も変わった一つの例である。

◎　文化祭実行委員の変化

この話合いを経て、文化祭実行委員は変わった。それは、その後の生徒の活動にあらわれている。実行委員としての活動を始めたころからこの頃までは、話合いをするにも、準備をするにも、まず教員が働きかけてから生徒が動き出す場面が多く見られた。しかし、これ以後は自分たちで必要なことを考え、計画を立て、それを持って相談に来るようになっていった。十月の半ばに私が２年生の修学旅行で一週間不在であったときも、生徒だけで話合いを進め、後夜祭の台本と配役まで決めていた。一週間前からは衣装作り、スポットライト操作、チケット作成、合宿でのリハーサルなど、それぞれが自分の役割を果たしながら活動していった。

けれども本番まで時間もなく、毎日遅くまで学校に残り、間に合うか間に合わないかの瀬戸際のところで作業を続けていた。そして当日となり、本番を迎える。本番はリハーサル通りにはできなかったが、フィナーレでの実行委員長の言葉と涙、後夜祭プロジェクトリーダーのやり遂げた充実感から流した涙、他の文化祭実行委員たちのやり遂げた満足感に満ちた表情に、生徒の自己有用感の高まりがうかがえる。それは文化祭終了後の振り返りの話合いの感想にも表れている。資料５の実行委員長の感想には、本校に対する所

資料５　文化祭実行委員長の感想

中高に入学してよかったと思う。中高最高!!

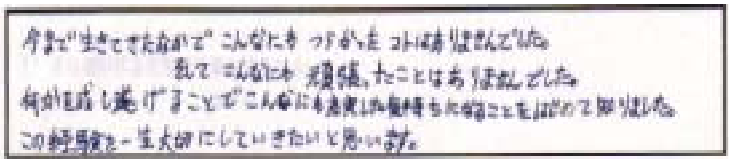
属意識の高まりが見られる。さらに資料６の文化祭実行委員のアンケートから、この文化祭が実行委員にとって大変充実したものであり、達成感を味わうことができたことがわかる。

また生徒が文化祭で見つけた「幸せのかたち」は、主体的に試行錯誤しながら活動していくことで得られた「充実感」と、生徒が協力して文化祭をつくっていく中ではぐくみ、再確認した「友情」であった（資料７）。

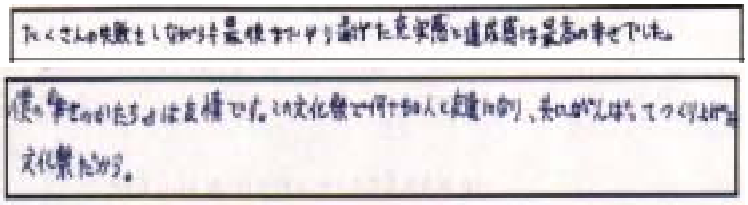
この文化祭を通じて、文化祭実行委員の意識は、図２にまとめたように、個人としての意識から集団の一員として文化祭を成功させようという意識へと変化していった。

以上のことから、文化祭実行委員が自分の役割を理解し、計画に沿って文化祭を行うことを通じて成就感・達成感を味わい、さらに活動を振り返ることを通して自己有用感を感じることができたといえる。

資料６　実行委員の文化祭を終えての感想



資料７　実行委員の実現した「幸せのかたち」



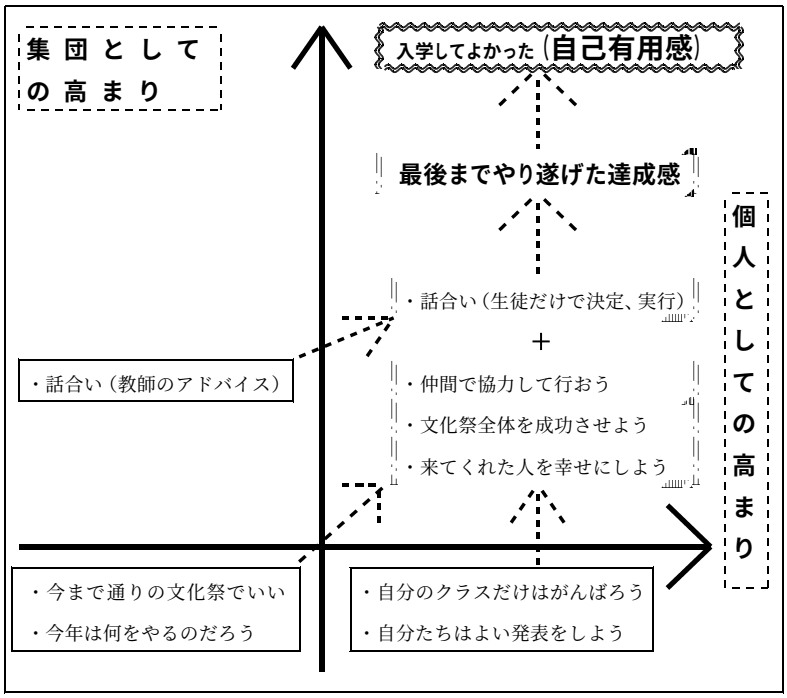


図２　文化祭実行委員の意識の変容の構造図

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

１　研究のまとめ

○　前回の文化祭を振り返る話合い活動を行った結果、今回の文化祭の課題が見つかり、目標が設定でき、その課題を解決しようという意欲が生まれた。

○　話合い活動や、協力して文化祭の準備をしていく中で、学び合うことを知り、自己理解を深め、自分の役割を自覚して行動しようとする姿勢が生まれた。

○　文化祭をつくり上げていく過程で、課題解決のプロセスと喜びを知り、文化祭実行委員は充実感・達成感を味わい、自己有用感を高めることができた。

２　今後の課題

○　中心となって活動する生徒だけでなく、今後は参加する側の生徒も達成感を感じることができるような学校行事の場を工夫し、自己有用感を高めていきたい。

参考文献　『改訂新版　実践的研究のすすめ方』　群馬県教育研究所連盟